

※こちらの原稿は、中学生以上の方が対象の課題です。

この枠で囲んでいる箇所がイラスト(さし絵)の課題場面です。

課題1

表紙

① ぼくの名前は888。
 ハッピークハチジュウハチじゃなく、8が3つ
 のハチミツだ。
 人よんで、スーパートリプルエイトとは、ぼく
 のことわ。
 どんな食べ物もグリーンとおいしくして、だれを
 も笑顔にする不思議な力をもっている。

② ぼくのふるさととは、山のふもとのアカシアの
 森。

③ たくさんのミツバチたちに少しづつ集められ
 て、ねかされて、あまい、あまい、金色の888
 になったのわ。

課題2

④ 今、ぼくは町のレストラン、「ハニー」でおじさ
 んとおばさんと暮らしている。はちみつ料理を
 食べるに、毎日いろいろなお客さんがやってく
 る。

⑤ 「ハニーレモンスカッシュ、4つと、ハニーマス
 タードチキンが3、しょうが焼き、1です」
 と、おばさんの明るい声。
 「ハイよ」ウキウキしたおじさんの声。

⑥ おじさんは、ガラスのコップをならべ、レモン
 汁と888と氷とサイダーをそそぐ。それから
 888としょうゆと粒マスタードを混ぜたタレ
 に鶏肉を、888としょうゆとお酒としょうが
 を混ぜたタレに豚肉をつけこんだ。
 どれもこれもぼくの出番だ。

⑦ 「やあ、おいしくなーれ。おいしくなーれ」
 おじさんの呪文でぼくは元気1000倍。
 すっぱいレモンちゃんとは、いつものあまい、
 くるくるダンス。
 お肉はつついて、くすくすと大笑いしてやわら
 かくなる。
 ジュージュージュー、香ばしいニオイがたちこ
 める。

⑧ ある寒い日、お店に見かけぬお客さんがやって
 きた。

(8)の続き

フードつきの長いコート、毛皮のブーツと手袋
 に白い大きなマスクをして、細い目だけが光つ
 ている。すみっこの席に背中を向けてすわると
 「は・ち・みつ・ホットミ・ルク」と小さな声で
 注文した。

課題3

⑨ ちよつと、あやしいお客さん。
 おじさんもおばさんもキョロキョロとのぞきこ
 むけど、お客さんはコートもマスクもはずさな
 い。手袋もしたまま、両手でカップをはさんで
 いる。そして、みんながちよつと目をはなした
 すきに、一瞬、マスクをずらしてミルクを一
 口。

⑩ 「じわー」
 888だけが見たその顔は、が耳までさけた
 山のケモノだ。

⑪ ケモノのノドはザラザラ真っ赤にはれている。
 ゴコンと飲み込まれた888ホットミルクは、
 金色のトロトロパワーで、ばい菌をやっつけ、
 荒れたノドのかべをなめらかにしてやったよ。

⑫ 「ゴチ・ソ・ウ・サマ。コホン。コホン」
 「お風邪ですか？ ノドの痛みにはハチミツがよ
 くききますよ。よかったら、これ、おまけで
 す」
 おばさんは、引き出しから、小さなハチミツの
 ビンをさしだした。

⑬ お客さんは小さなビンを受け取り、お札を出し
 た。おばさんが、おつりを計算して振り返る
 と、お客さんもお札もなく、葉っぱが一枚だけ
 残っていた。

⑭ しばらくして、レストランの前にアケビと山ブ
 ドウがドッサリおいてあった。
 「おいしいミルクとハチミツありがとう。ノドも
 すっかりよくなりました」と手紙があった。

⑮ 「この前のお客さんかな？」おじさんとおばさ
 んは顔を見合わせ、ぼくをナデナデした。ぼく
 は、いつそピカールとかがやいた。